

「東京新聞」の「平和の俳句」7月掲載の句から。「布団蹴り夜（よ）を寝る俺らは闇も蹴る 高木康輔（16歳）」<いとうせいこう 「発言力がない」自分たちの苛立（いらだ）ちを言葉にしたという。共に闇を蹴ろう。> <金子兜太 青年たちは、いつかは闇を蹴散らすほどの力を秘めている。期待大。> 16歳の青年が布団を蹴るように闇も蹴ると言う。彼は闇の実態を鮮明に捉えていないだろうが、闇の存在はリアルに分かっている。闇は人間に覆いかぶさる夢と希望を奪い取る力ではないか。怒りをもって、これを蹴散らし、生きがいをしっかりとつかみ取る。若者たちが、そのような人生を見出してほしいと願っている。私も闇を捉え切れない。ただ、「俺らは」という青年たちと一緒にあって、闇を蹴り続ける者でありたいと思っている。

「花カンナ言葉の狼煙（のろし）あげるとき 曳地トシ（59歳）」<いとうせいこう 秘密保護法、安保関連法、そして共謀罪。今こそ抗（あらが）わねばならぬと作者は一句を為（な）した。花カンナが凜（りん）として、なおかつ美しく浮かぶ。> 「狼煙」という言葉は、日本の時代劇か米国の西部劇で聞いた言葉でしかない。私も、秘密保護法、安保関連法、そして共謀罪に反対し、国会前に何度行ったことか。地域の反対集会を幾度企画し、参加したことか。しかし、狼煙の上げ方が足りなかったのであろう、全てに敗北した。沖縄県民の合言葉「勝利するまであきらめない」を覚え、狼煙を上げ続けよう。

「子と住めり平和の音よ目覚めよし 稲本八重子（81歳）」<金子兜太 子供といっしょに住んでいると、「平和の音」だらけだ。話し声、笑い声、泣き声だって明るい。同居の犬や猫も。近所の人も。> 81歳の稲本さんは子どもたちと一緒に住んで、平和に暮らしている。憲法9条のお陰ではないか。私も「九条の会」に加わり、仲間と「狼煙」を上げている。その仲間は大方高齢者である。彼らは等しく、「自分のための活動ではない。孫たちが戦争に取られないためだ」そして、「『おじいちゃん、あの時、何をしていたの』と言われなかったためだ」と言っている。「三才の子に百年の平和欲（ほ）し 増谷信一（62歳）」<金子兜太 孫の次の世代まで、戦争の無い時代であってほしいと強く望む。> <いとうせいこう お孫さん、ひ孫を見て平和を思う人の句は多いが、シンプルで強い一句。> この句は、私や仲間たちの望みを言い当てている。若者たちが自分に直接関わる問題であることを知って、平和への関心を持ってもらいたい。平和は自ずと来るものではなく、国民の力で作り出していくものだからである。

「平和とは黙って荒地を均（なら）すこと 丹羽俊昭（83歳）」<いとうせいこう 戦争が作った荒地をひたすら無言で世話していく日々の重さ、大切さ。> <金子兜太 黙って荒地を均すところに平和あり。荒地をかき回しても荒地。> ルカ福音書3章4節、5節で、主イエスを先導する洗礼者ヨハネの働きについて、「主の道を整え、／その道筋をまっすぐにせよ。谷はすべて埋められ、／山と丘はみな低くされる。曲がった道はまっすぐに、／でこぼこの道は平らになり、人は皆、神の救いを仰ぎ見る」と告げている。高慢という山が切り崩され、卑屈という谷が埋められ、平地の真っ直ぐな道を備えよと言っている。「被災者に国の隔てはないものを 近吉三男（101歳）」<いとうせいこう 被災者と言うと、つい国内の人々のことだけを考えてしまうが、それは世界で災害やテロにあった難民も同じ。彼らにも救いの手を。> 上下なく、隔てもない所で、人は共に生き、平和を喜び合うことができる。その夢を追い求める者でありたい。